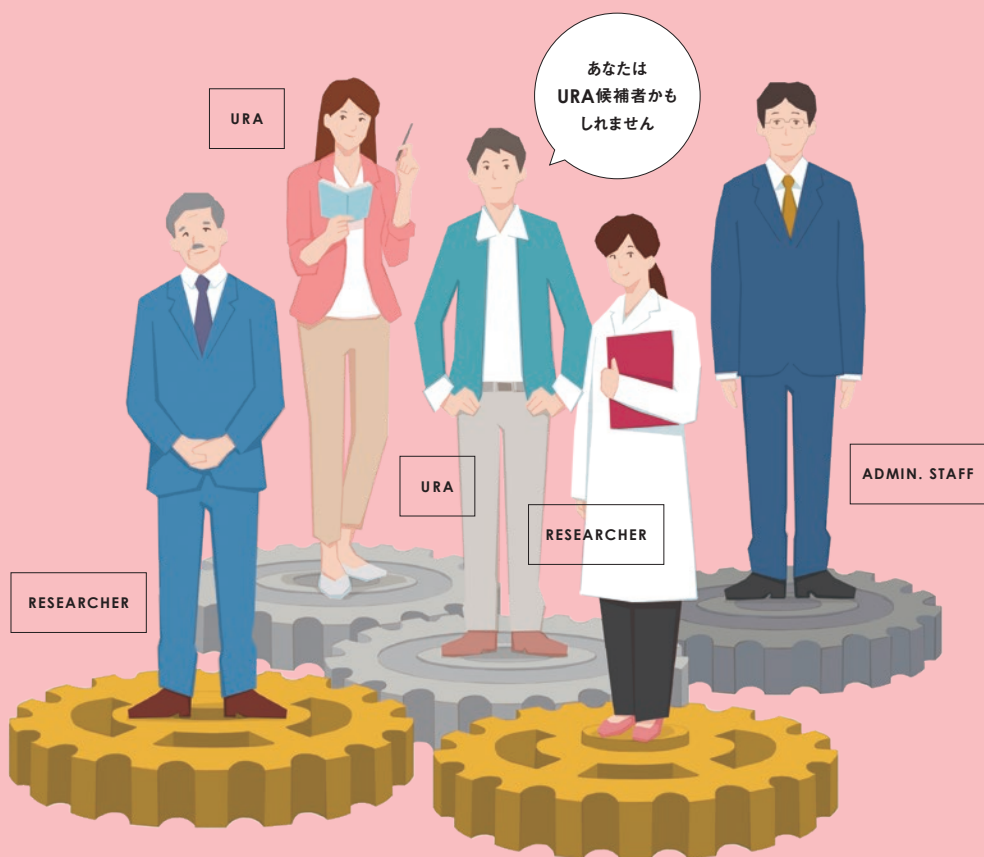


東京大学

URA

URA (University Research Administrator) 制度のすべて



UTRA

The University of Tokyo
Research Administrators

URA (リサーチ・アドミニストレーター)とは？

リサーチ・アドミニストレーターとは、大学等の研究推進支援を担う専門人材で、University Research Administratorを略して「URA」と呼ばれています。

近年、社会ニーズへの対応、教育・研究の高度化、国際競争の激化などにより、研究活動に付随する業務が増加しています。また、競争的資金の増大に伴って、申請業務や適正管理などの研究マネジメント業務に割かれる時間が増大し、研究者に大きな負担が生じています。

このような状況の中、高度専門人材として**URAを配置することにより、研究者が研究に専念できる環境を実現し、大学の研究活動の質的強化を図ることが**期待されています。

平成23年度に始まった文部科学省の「リサーチ・アドミニストレーターを育成・確保するシステムの整備」事業を端緒に、日本の大学・研究機関でもURAの配置が進められてきました。

文部科学省のURAシステム整備事業が始まった頃、「Research Administrator」を日本語にどう訳すのがよいかということが話題になりました。研究推進、研究調整、研究管理、研究支援などに「専門職」を付けるという意見が多かったと思います。訳語ではありませんが（作家に対する）編集者、コーチまたはトレーナー、執事、（古い商家の）番頭さんなど、その役割を示す例えもありました。このように多くの案が出てまもらないのは、URAの役割についての解釈が色々あって、1つの言葉では表せないからだだと思います。そして解釈が多いのは期待が多いことを意味しているのです。

宮田知幸「大阪大学URAシステム整備の「これまで」と「これから」〈その1〉大阪大学URAシステムの概要」
URA MAIL MAGAZINE vol.40(https://www.ura.osaka-u.ac.jp/uramagazine/vol_040.html#01)より

大学を取り巻く環境が変化する中、大学・研究機関における研究活動も、研究者だけでなく、様々な人材がタッグを組んだ「チーム」で取り組むことが求められています。URAは、そのチームの一員なのです。

**芝居の舞台が主役ひとりでは
成立しないのと同じで、
研究プロジェクトもいろいろな仕事をする人がいて
はじめて成り立ちます。**



『URAを知っていますか』（2013年 東京大学リサーチ・アドミニストレーター推進室）より、山中伸弥先生（京都大学）の言葉

URAの業務内容とは？

URAは研究の幅広いプロセスに関わり、研究活動の活性化に貢献しています。その業務は**3つの中核業務（プレアワード、ポストアワード、研究戦略推進支援）**とそれらに付加される**専門的な業務（関連専門業務）**に区分され、「URAスキル標準」としてまとめられています。

研究プロセスに切れ目がないように、**URAの業務も「点」で捉えるのではなく連続性を意識することが重要**です。最近では、URAがIR (institutional research) や大学運営に関わることもあり、URAの業務は日々多様化し、深化しています。

研究プロジェクト開始を支援

- プロジェクト企画立案
- 関係者等との折衝・調整
- 外部資金の獲得 など



プレアワード

研究プロジェクト実施を支援

- 進捗管理・予算管理
- 評価対応
- 報告書の作成 など



ポストアワード

研究を戦略的に支援

- 政策動向の調査・分析
- 研究力の調査・分析
- 研究戦略の策定 など



研究戦略推進支援

研究を多面的に支援

- 産学連携、国際連携
- 研究倫理・コンプライアンス
- 研究広報、安全管理 など



関連専門業務

URAをはじめとした研究開発マネジメント人材は、科学技術イノベーション政策と研究現場をつなぐ高度専門人材として、政策的にもその重要性が認識されています。

第6期科学技術・イノベーション基本計画（2021年度～2025年度）には、高度な専門職人材等が一体となった「チーム型研究体制」の構築に向け、専門職としての質の担保と処遇の改善に関する取組実施が記載されたほか、研究データ管理・利活用を促進するためのキープレーヤーとしてURAが言及されました。

研究活動を取りまく環境の変化などに応じて、URAがカバーする業務範囲は拡大・深化しており、学術の振興という軸は持ちつつ、URA自身が柔軟に適応していくことが求められます。

東京大学が考えるURAとは？

大学によって、URAの配置方法やURAのミッションは異なります。多くの大学では本部URA組織に集中的にURAが配置され、外部資金獲得や産学連携、執行部の戦略立案支援など、大学の状況や方針に応じたミッションを担っています。

東京大学では、**URAの「認定」制度をとり、大部分のURAが本部ではなく研究科・研究所・センターなどにいることが特徴**です。

東京大学の認定URAの業務内容を見ると、研究科・研究所・センター全体の研究推進に関わり、ミッションに応じて中核業務・関連専門業務に一体的に取り組む事例が多くあります。個別の業務（プレアワード、ポストアワード、研究戦略推進支援、関連専門業務）における専門性の発揮だけでなく、**組織全体の活動活性化に向けたURAの活動**が求められています。

UTokyo Compassに見るURA

2021年9月に公表された東京大学の基本方針『UTokyo Compass』では、4つの柱のうち「知をきわめる」と「場をつくる」の中にある目標のもとに、URAに関する計画が書き込まれました。

UTokyo COMPASS

知をきわめる(Perspective 1)

1-2【多様な学術の振興】 計画1 研究基盤の強化

リサーチ・アドミニストレーター(URA)の参画により、学術研究の調査・分析、企画立案、管理運営を円滑に実施する体制を構築するなど、個々の研究者の基盤的な研究財源の確保を支援する。汎用性の高い先端設備を共用設備として整備し利用環境を整えるため、学内の先進的な事例を共有し、全学に展開する。図書館の情報提供体制や学術資産のアーカイブ機能を強化するとともに、IoT・衛星等の観測データや博物館・各研究所等で取得される大量のデータの保存、登録、管理、解析支援などの機能を強化して学術資産の利活用を促進する。

場をつくる(Perspective 3)

3-2【教育研究活動の支援】 計画1 研究に専念できる環境の整備

サバティカル研修取得を奨励し、取得件数を毎年50件に増加させる。会議の目的の明確化やデジタルツールを利用した情報伝達により研究・教育以外の教員業務を削減するとともに、URAなどの研究支援スタッフの充実等により、教員の負担を軽減し、研究に専念できる環境を整備する。

URAに求められる3つの力

東京大学が考えるURA像は、「**東京大学リサーチ・アドミニストレーター制度の実施方針**」※に**“URAの定義”**として示されています。ここに示されたURAの定義を紐解き、URAに求められる力として整理したのが右の「**俯瞰力**」「**高度な専門性**」「**主体性**」です。

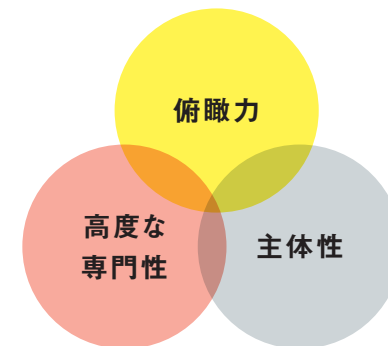
「俯瞰力」はURAとしての活動を方向づけるもの、「高度な専門性」はURAとしての知識や技術、「主体性」はURAとしての仕事の向き合い方を決定づけるものです。

URAにとって重要なことは、これらを**バランス良く備えている**こと、そして、状況に応じて**適切に組み合わせる**ことです。

例えば、俯瞰力で方向を決め、高度な専門性を使って、主体的に動かすという一連の流れがイメージできます。実際には、「俯瞰力」によって自分に足りない「高度な専門性」が見えてきたり、「主体性」を発揮して動くことで、新たに「高度な専門性」や「俯瞰力」を得るという場面もあります。

URAのミッションの変化などによって、ここに示した内容の詳細も変わり得る、また深化し得るものです。URAが備えるべき“能力リスト”のように使うというよりは、自身のスキルアップなどに向けた振り返りの観点として活用いただくことを願っています。

※「東京大学リサーチ・アドミニストレーター制度の実施方針」
https://www.u-tokyo.ac.jp/gen01/reiki_int/reiki_honbun/au07410621.html



学術研究をとりまく状況をどう認識し、どのように自らの活動を方向づけるか

- 教育研究、学術界、産業界、政策、社会等の状況や動向をとらえ、自らの活動を正しく方向づける力
- 様々な階層（世界、国、地域、大学、部局等）において自らを位置づける力
- 東京大学URAとしての評価軸を持ち、省み発展させる力

何を理解し、的確に使うか

- 研究推進に係る広範な専門知識と知識習得力（科学技術・学術政策、研究倫理、研究費、国際／産学／社会連携、大学組織 等）
- 倫理観、規範意識 ● リスクマネジメント
- 情報収集・分析能力 ● 企画力、提案力
- 交渉力、調整力 ● 文章構成力、表現力
- 学術的理解力

仕事とどう向き合い、価値を生み出すか

- 周囲に働きかけ、協働する力
- 自らを律し、業務を遂行する力
- 自らの役割を理解し、付加価値の創出に取り組む力
- 業務の本質・全体像を理解し、判断する力
- 高度な専門性をもって、理想的な方向性につなげる力

URA認定制度と育成・キャリアパス

優れたURAの育成・確保に向け、東京大学では、学内でURA業務を行っている教職員の方について、その能力に応じて大学のURAとして総長が認定しています。他大学に先駆けてURA認定制度を進め、さらに人材育成、雇用制度をセットとして、継続的なURAの活躍を実現しています。

1 あなたはURA候補者かもしれません



「私もURAかも?」と思ったら <https://www.ura.adm.u-tokyo.ac.jp/about> からURA認定申請要領を確認してください。

2 URA研修を受けましょう

毎年6月頃に開催される『URA研修』の受講は、URA認定申請要件の一つです。URA業務の基礎から実践まで、URAとして活躍する講師から幅広く学ぶことができます。座学に加えてグループワークの時間もあり、異なる部署の方と交流できる点も好評です。



3 URAに認定されるメリットとは?



URAに認定されると、認定者間のネットワーク構築やノウハウ共有、スキルアップに向けた機会などが得られます。所属部局での認知度が上がり、業務の幅が広がったと感じる認定者も多くいます。

4 URA認定には3つの区分があります

URA認定には経験や能力等に応じて3つの区分があります。また、シニアURA・プリンシパルURAの認定者については、高度学術専門職員・高度学術専門員へのキャリアパスが開かれています。



データで見る東京大学のURA

3つの本部組織、25の部局に認定URAがあります。

認定者の所属分布 (2024年4月時点)

■ プリンシパルURA ■ シニアURA ■ URA

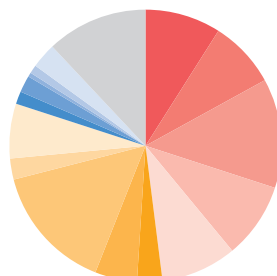
URA推進室	■ ■ ■ ■	医科学研究所	■ ■
産学協創推進本部	■ ■	東洋文化研究所	■ ■
本部事務組織	■	社会科学研究所	■
法学政治学研究科	■	生産技術研究所	■ ■ ■ ■ ■ ■
医学系研究科	■ ■ ■	史料編纂所	■
医学部附属病院	■	定量生命科学研究所	■ ■ ■
工学系研究科	■ ■ ■ ■ ■ ■ ■	宇宙線研究所	■ ■ ■
理学系研究科	■ ■ ■	物性研究所	■
農学生命科学研究科	■ ■	先端科学技術研究センター	■ ■ ■
経済学研究科	■	大学総合教育研究センター	■
総合文化研究科	■	未来ビジョン研究センター	■ ■ ■ ■
数理科学研究科	■	情報基盤センター	■ ■
新領域創成科学研究科	■ ■ ■ ■	高齢社会総合研究機構	■
情報理工学系研究科	■ ■	URA推進室の4名、■ ×3名 ■ ×1名は エフォート管理で本部・部局の双方に参画	
公共政策連携研究部	■ ■		

博士号の保持 あり なし

認定者の業務エフォート (2024年3月末時点)

認定URAは多様な業務に関わっています。講義や研究など、研究マネジメント以外の業務に関わっているURAもあります。

- 研究戦略推進支援
- プレアワード
- ポストアワード
- 教育プロジェクト支援
- 産学連携支援
- 知財関連
- 国際連携支援
- 広報・イベント
- 安全管理&倫理・コンプライアンス
- 機関経営
- ファンドレイズ
- スタートアップ支援
- 安全保障貿易管理
- ELSI課題への関与
- オープンアクセス／オープンサイエンス
- 研究開発マネジメント以外の業務



学内外への広がり

学内への広がり 認定URAに閉じないネットワーク型体制を目指しています

研究推進に関わるコミュニティの知を集め、幅広く研究推進に関わる方に向けて情報をお届けするウェブサイト「**UTRA Commons: Community Portal for UTokyo Research Administration**」を運営しています。

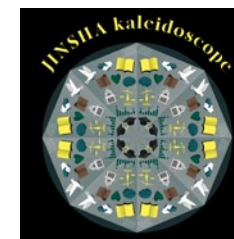


p.06に掲載のURA研修に加え、URAワークショップやURA勉強会など、学内の皆様にご参加いただける機会を提供しています。

学外への広がり URAは広いネットワークの中で活動しています

リサーチ・アドミニストレーション協議会 (RA協議会)は、全国の大学等のリサーチ・アドミニストレーション業務に関わる人材の集まりで、**当該業務に関わる人材の育成・情報交換等を通じた我が国全体の研究力強化への寄与**を目的としています。東京大学は、2023年度よりRA協議会の組織会員となりました。URA業務に携わる方・興味のある方が、業務に関わる情報収集やスキルアップ、ネットワーキング等の機会としてRA協議会を活用しやすくなり、大学のさらなる研究力強化につながることを期待しています。

人文・社会科学系分野特有の支援の方法などに関する相談・情報交換の場として、2014年、大阪大学・京都大学・筑波大学のURAでネットワークを発足しました。以降、人文・社会科学系担当URA有志のネットワークの輪が拡大し、現在13機関*が参画しています。「**人文・社会科学系研究推進フォーラム**」や「**JINSHA情報共有会**」の開催を通じ、URA、研究者、事務職員、府省・資金配分機関担当者などが、ともに人文・社会科学系分野のよりよい研究推進のあり方を議論しています。2023年度には、東京大学が幹事校として「**第9回人文・社会科学系研究推進フォーラム**」を開催しました。



*大阪大学、筑波大学、琉球大学、京都大学、早稲田大学、北海道大学、横浜国立大学、中央大学、広島大学、東京大学、東北大学、新潟大学、神戸大学

東京大学で働くURA

開拓者として国際共創ラボに常駐

研究推進部門長として部局の運営全般に携わっています。その中の一つとして、東京大学の国際的な拠点を設置・運営すべく、スウェーデン・カロリンスカ研究所に常駐しています。

研究者の声に耳を傾けて本当に必要としているモノやコトを提供し、“後方支援”だけではなく“開拓者”として戦略や実行計画を練り、これまで誰もなし得なかった新しいことを持続的に実現できるよう、情熱的に業務に取り組むことを求められています。業務を遂行する上では、誰よりも手を動かし、時間も労力も惜しむことなく、主体的に行動することを期待されています。

海外というこれまでと全く違う場所で、新しい形の国際共創ラボを実現するためには、時には思い通りにならず報われないと思うこともありましたが、簡単に“出来ません!”と返すのではなく、常に物事を俯瞰的に捉え“どうすれば出来るようになるのか?”を心がけることで、たとえ失敗したとしても、どんなに小さな成果であったとしても、私にとっではどれも豊かで贅沢な経験となっています。

まだまだやることは山積していますが、常に“開拓者”精神を持って着実に進んでいきたいと思っています。



東京大学シニアURA
中川 優里
定量生命科学研究所

研究者に寄り添い魅力を発信する

所全体を担当するURAとして、研究支援に関わる業務全般に取り組んでいます。認定当初より、URAは研究者と様々なステークホルダーを「よりよい形でつなぐ」役割であるとの思いから、研究者に寄り添い、ベストな状態で研究に臨める形での提案を行えるよう、意識して活動しています。

部局全体に関わる研究戦略として、文部科学省の審議会を傍聴して部局の執行部に伝え、概算要求や外部資金の提案をしたりもします。プレアワードでは、研究者個人では収集する時間が取れない外部資金の情報をExcelにまとめて共有し、研究者の希望に合うものがあれば個別に提案します。

全所的なプロジェクトについては、ポストアワードもサポートしています。また、国内外の地域との連携が増えており、各地域との協定・覚書の締結支援や、プレスリリースなどにも関わります。

最近は特に研究広報に力を入れており、広報戦略の提案から実行まで全てに関わります。多くの方に研究を身近に感じてもらうことで、研究の裾野を広げていくこともURAの重要な役割であり、将来的に見れば、歴史学の研究力強化にもつながると考えています。



東京大学シニアURA
平澤 加奈子
史料編纂所

プロデューサーとして伴走支援

先端研全体を担当するURAとして、所のような活動をプロデュースするのが仕事です。最近では、先端研と生研で連携して民間企業と包括連携協定を締結し、そのもとで将来の研究テーマの探索から始める大型共同研究プロジェクトの立ち上げに関わりました。協定・契約の文案作成、プロジェクト体制の検討、スケジュール管理、広報・イベント企画、予算執行の段取りなど、必要なことは何でもやります。

URAは研究する環境を整える仕事。研究に専念できる場をつくることは、研究者だけではなかなかできません。研究者が潜在的なものも含めてやりたいと思っていること

を引き出しプロデュースしたい。そのために、研究者がどんな研究をしているか知る努力は惜しみません。特に先端研は原則任期10年で、5年経つと半分の人が入れ替わるので、所内外の講演会などに足しげく通って最新の研究内容をフォローしたり、ランチで研究者を見つけたら話しかけてみたり、それらを通して自分を知ってもらうようにしています。

URAは新しいことに挑戦できる仕事です。多様な分野の研究者が集う先端研という環境は、とても刺激的で面白いです。



東京大学URA
喜多山 篤
先端科学技術研究センター

科学を楽しみ、ともに道をつくる存在に

100年後の地球のために行動できる科学者たちの育成を目指す『One Earth Guardians育成プログラム(OEGs)』の立ち上げから関わり、企画・運営の全般を担当しています。OEGsは教育・研究プログラムですが、社会と連携して課題解決を目指す場でもあり、学生と企業、社会と学内などをハブとしてつなぐのが重要なミッションの一つです。

息長くつづけていくプログラムだからこそ、常に新しいことを取り入れる姿勢を大事にしています。研究者が抱いたひらめきを形にすべく挑戦し、一緒に新しい道を開拓していくことに大きなやりがいを感じています。

多様な業務を担うURAには、「それは私の仕事ではない」と仕事を選びすぎる姿勢は馴染まない反面、何でも屋になりがち。単なる「都合の良い人」にならないよう、自らのビジョンに照らし、自分が関わった意味を見出すことを忘れないようにしています。核にあるのは、ポストク時代感じた「科学と社会の関係をより成熟したものになりたい」という思い。そこから産学連携などに興味を持ってURAにつながりました。科学という営みが楽しく続けられるよう貢献していきたいです。



東京大学URA
中西 もも
農学生命科学研究科



研究を加速するアドミニストレーションを。

